



関ヶ原軍記

二編 九一

九二

特
遠13
2207
26



門八遠13
號2207
卷26

込本牛
池清

関ヶ原軍記武篇卷之廿壹

目錄

- 一 德川源君所謀略諸將功績事
- 一 并源君関東城所進發の事
- 一 英濃國桑村乃臨雲寺より大槓
- 一 教上人の事
- 一 并石田乃意天守之
- 一 德川家之

繼 譚 書
 倭 軍 書
 唐 軍 書
 隨 筆 物
 國々名所
 近世戦争書類
 右々外數品此座比写中況々程奉願也

書物價本所

東京牛込細工所
誠光堂 池田春清吉

繪 本
 書 本
 滑稽物

曲阜馬琴之作
 其外諸先生作
 軍書
 敵討
 諸家騷動
 御捌物

松子城窺ふ事

池清



園ヶ原軍託式編卷之廿七

徳川源表御謀畧総將城一

の事

并 源表園東城御進取の事

曰く 徳川内府公も実東の

軍台城二事分ち終ひく

一事の江戸 中細云及也

橋手とて申他乃武所發向
の由書有く列ち

内府公も惣軍に百八千余騎上
方武原を平しつゝ東海及
武所進發あり是九月一日の
所出る所なり斯多流列破身よ
流志陣の七川大垣乃撤して
大谷吉隆軍評定金吾中納

云秀秋籍免忍愛送んと相
吹り合ふ倭奸として大谷武
歎く吉隆欠心少く吉実
と心乃油所の時裏切ら及び
りりも敵大垣乃撤りり軍
をとおして吉隆つゝよ於て
合戦も及びり

云書小回く紋ぎ之し一し所しの室
ありて居ゐらるゝものの四しの室
ありんそ大將たいしやうある人の結むすく
その利りを考かぐく年としより
しらべさるるあり物ものトて
四持くわもち大名だいめいありひと願ねがふを
も利り欲ほくくして金銀きんぎんを
集あめらるるも唯ただ一ひと所しの室
と

して栄耀えいようのまりり別べつ
て何なにの用もちありまんん兵へい賢けん長ちやう
志し正せい直ちく乃の人ひととそたらるる
ありて一唐たうとし教きやう玉ぎよくの時とき
百里ひやくりと思ふはるる疾はや光くわう乃の玉ぎよくと
送おくるるこれ謀まう畧りやくとして
そのまりりとあるるんん為なるる
衣いを着るるといふふのまりりを

るにたううのありはる。
千齊乃國の感王室りく
此疾光此玉を百里を照す
我も賢人曰名あつて
能く千里法印を輝り
ぬれらるるあつて定百里
決て次珠をたううとせ
んや人の室なども融費

物とありこれまうく賢
至るゆへありはる
徳川家あり井伊本多
柳原此三将あつて教度
軍陣ありた右陣あり
かあ天下既手定あり
徳川家三傑乃長とあり
此二人をとりてるなり

去河と平兵衛おのて此河を
江戸の御城は頼りく
破年三河城江戸の戦ひも
味了孫利仕り一糸のそま
御出馬おろさるべし旨井伴
布多より軍使を以て言上を
家康公是を笑て百て大ひく
御機憶りくこれと一月井

伴本多の武勇智謀兼復の
一徳将乃るくもはるき
一也孫利とゆりはくびれ
先手一太中なり款中にも
ちりて古太中以来忠願の者
を門年よりゆら池田福崎
浅野度臺黒田生駒田中
等子のめんく先取是心なく

大我を扇^{あき}たるは實^{まこと}しく井仔
本多乃武人他^たく異^よなる者^{もの}
年^{とし}よりくありと 只^{ただ}し
叔又^{また}友^{とも}おありの事

東照文^{ぶん}より大^{おほ}きなり清^{せい}徳^{とく}畏^{おそ}
あり清^{せい}徳^{とく}代^{しろ}流^{りゅう}くく
常^{じょう}徳^{とく}石^{せき}のくく^に放^{はな}く^軍志^し
城^{しろ}お年^{とし}くく^味の被^{おほ}母^ぼ王^{わう}

珠^{たま}投^なく^日臣^{しん}のくく^一号^{ごう}
よ成^{なり}くく^其理^りを^何ト^し
ありけ時^{とき} 内^{うち}府^ふ公^{こう}志^し

上^{かみ}急^{いそ}なり井^い仔^ざ 本^{ほん}多^た 柳^{やなぎ}葉^はも
向^{むか}備^び備^びく^南家^けを^紙と^まま
武^ぶ勇^{ゆう}智^ち謀^{ぼう}の^長下^げ以^も上^{かみ}松^{まつ}人^{ひと}有^あ
又^{また}二人^{ふたり}を^漢の^三傑^{けつ}と^いふ^{なり}
それ^{それ}等^らの^さめ^めく^十人^{にん}

孔子は十哲ともいふが、去れ
ばこの三人は、お同し者十人
有らざるなり。作せらるる
其名を誰とも。長せぬ
この中急干、只今。上意有
し。と清徳代流酒井の一類、并
大久保一守、本多の一守、奥平
お次、始めと、して三遠、支那、等

徳臣、幾子何五人、有あんの
御作せしむ、中、高て、殊多
作せの定めて、秋、子、や、る、ん
と、以、後、を、面、一、一、一、と、お、定
めて、いのち、と、惜、ま、る、お、ま、る、
く、此、御、清、徳、畧、の、真、意、干、神、妙
あり、て、自、然、の、秋、身、と、忘、れて
面、々、相、御、く、存、あ、る、ま、る、ま、る、も

清勝利と故ら謀事人誠勵よし
ありし大田名人して凡人の
おろぶとてあつて河を断る
江戸 河城の清當る居るの
河本丸子松平固防と康重と
石川日向守と 作舟と信
又中仙及河發向あり
中納言秀忠と此清先手子

榊原式部と備康政續ひく本
多修後者ふ大久保見秀并びよ
一類酒井左衛門尉 松平七人
流彼是軍勢に万八千余人の
清定めあり叔又今津の押へ
よわあしりあてく 結城秀
康とるびり蒲生秀行等
惣軍一万四千人騎ありは夜

軍役を本役として跡々
出立あり 秀忠公の二里
門下りて 御を愛ありさそ

安長又年九月一日己の刻

内府公の御進發あり比白を
七本金比七本骨乃扇子比馬
市一那り比仗毒と四津ふめの
字の指物白撰必遣侍紐地を

小懐り金の丸大毒紐 毒青紐
皆く母衣比いろと遠つくを
知くと分取し 御進發
比涉鞆ひ実や三尺のつる
のえり子甲の弟と依と一張
乃弓のいさるとひの離ざんして
飛鳥も病る御武徳を謀り
和玉の 御名將ありと感

ト来る今日冥途の神社佛
圖緒寺徳山に逆賊追討の由
急あり初て所及中報日の神
幸川二日の度沃三日の小田原四日
を三崎又廿多法見寺六日多
鴻田七日の中泉八日多白須賀
九日多品崎十日多摺田十一日多
尾別法剛千以急陣この幕

井俾本多と始りとして法
先手此めん池田福一
度堂如度細川忠國法理お
その布紗々々所急陣と賀
一有り所逆ひとて来れ
らん内府公所機娘能
清急物よりいぞめひおのく
このうびれ所合力の境足るり

いさく軍忠をこのみぞん
むらこの 上意をいづれも
とば陣雨くく一雨あり井俣
本多をさぐく小泷信あり

糸村乃陽をさより大橋秋上の夏
并石田の黨天守よりて
徳川家泷進發の招子次何がある

斯く井俣直政 本多忠勝友人
右尾別清泷の城より
内府公乃泷信を因く十三日破年
手泷急陣十四日よの右田の滝り
延田那の乃をさぐくと通り終り
このせり同直進の法を結山
の信并び小山伏木道徳退治
泷武運長久の泷れをさぐよへま

のむ子 作波さう叔徳より
歎く物難敷中く幸ひ成るに
尚必糸むく此陽雲寺禅宗之
しけ大ま成る柿と巻子接で
敬とまら 内府公所後ド
く大棟の子も入るる海是之
小性在孫手に棄ひまべし其の
上をるりこれ石田法親少博

大垣より居城まらゆん部
作せられらる之海近智の面々
畏まらるるくまらと立寄り
手んぐく大業ひ有るこの時瑞
そく此禅僧利發あして悉く
大棟屋中ひと聖一なる
内府公大まらし御機嫌よく
その首途より紙を聖一なり

とて 所^{きん}朱^ん平^{しやう}寺^じ願^{げん}百^{ひやく}石^{いし}城^{じやう}下^か

きん 栴^{せん}寺^じと号^{ごう}と後^ごりり寺^じり

津^つ手^て幸^{きん}福^{ふく}寺^じといふ寺^じあり

栴^{せん}寺^じといふ寺^じ今^{いま}一^{いつ}寺^じあり

後^ご別^{べつ}の^の内^{うち}といふ寺^じ又^{また}武^ぶ原^{げん}の

府^ふ中^{ちゆう}といふ寺^じ世^よ代^{だい}中^{ちゆう}太^{たい}平^{へい}

年^{ねん}の^の時^{とき} 内^{うち}府^ふ公^{こう}御^ご寺^じあり

所^{しよ}成^{じやう}あり 所^{しよ}不^ふ祥^{じやう}といふ寺^じあり

寺^じ院^{いん}入^いりありありありの^のせう

の^の唯^{ただ}御^ご寺^じ人^{にん}と^と法^{ほふ}所^{じよ}を見^み

給^{たま}ひりるありありの^のて^てこれ^{これ}信^{しん}僧^{そう}

る^る七^{しち}旬^{じゆん}と^と余^{あま}り^りと^と信^{しん}僧^{そう}

様^{やう}慈^じと^とて^て信^{しん}僧^{そう}あり

家^け康^{かう}公^{こう}所^{しよ}後^ごと^とて^てい^いり

所^{しよ}坊^{ぼう}名^なと^とい^いり^りと^とて^てい^いり

七^{しち}旬^{じゆん}と^と余^{あま}り^りと^とい^いり^りと^とて^てい^いり

梅木してその花は咲きを見
んり大凡三十年來の内
年ありては物の用ふるも
難くせん梅はさくさく
越せんより樂しき事なり
後くと 作せらるる時を
梅木してあがく振返り
見くさればとくも見くさる

あらく秋年もさや七句
年余ら志つるにその奇は
先候もその所めどく不
悟のたしけ者して梅木
の一本をせむるゆへ南寺
今も樹木を本も
梅く繁しくあり由の助
けも那くさぬ又子の梅は

僧も難儀さへしと名も
あつり寺も末代乃事
境の為り部のごうくさ
きれども身れごあとなあ
りども又そ所るごも子孫の
為をたのひ給りか教生は
野探も能事程くく
内子そん警業乃功とそ

あふがらまのり尺糸する
とらるりそ新もちや
能き年形り左りの子
寫と居る在り手に鞭
りち帷子と山忌
大根ざしとせしる白
娘の翁と絵字あして
るがあらへ大悪人とそ

序

秋のついでに移る

ののろくばたこそ

安んじぬらん

新編ト云のそ和の身は

うあんとと日くひんれは

此廊

東照宮下も御機憶らん

恵ちに寺入り入の心

予の家康あり恒僧の中

さうととらうと予毛

ゆんまうちうり故程子孫の

とあまば忠を屋まこと

作せぬ老僧何よても至ま

まうととらうあまうはだ

と長せの時候僧まへく

されば此寺内の年貢賦店
屋方より催使するなり
迷惑仕仕境内の年貢をば
市教免お取の度以實地を
とも寺とも且那あつて
末世千をそる度好し又
と分此寺願も何の子細
く中受るとも定めたり

放さるゝ事あらんを各用よて
此と中まこのせりお取し
ゆり於ての百も願まへま
ところありまづらふ三指石
の寺願を中交りこの
寺掃寺といふ日本掃で
三ヶ寺ありこのせり
俄り 也る百立れ天下此

武目たけめを立たてめし其後子の備
城しろの尋ね有ありれども知しるは

とあり

部べ 内府公うちうらぎは九月二日

破年やぶねんと流ながしありし
大垣おおいの城しろよりいざしる悪あくび
此こゝの在ありて追おり来きりて実まこと東あづま
の軍かみ勢せい凡およそ六む万人にん 責せきせり

兵へい今いま 徳川とくがわどの破年やぶねんは

城下しろしたと以も通とほりありしと昔むかしは
城中しろちゆう俄ふたに騒さわ動どうして勢せいは

家康いえやす来きりしと旬しゆんの西にしも
ろろありし形かたちくその松まつ子こ城しろ足あり

通とほりしとて天あまをへし西にしも
よる石田いしだ 小西こにし 深田ふかだ 大谷おほやの

部べ 弓ゆみ矢や印いん者しやのめんくわ

らばとてさへふりほく又重徳
ふれとつめりその内舎
の下あはれ軍兵をとお集
まりあはれ

家康大軍を登らるる家
もこれく身流りて島
此時石田三成大いりり
冥赤勢とていひりり極有とて

今津佐竹等此押への勢
一万の兵とて又新の城
らせ江戸ありて此當りし軍
をよむのこゝをせん

徳川慶喜ひし中とて震つ
出らるるも一万の兵とて
むそのとて一時乃老とて
指大名の大軍が此志とて中

是長平小野をて出べまやう
あり徳色を
徳川どの

まていあるん
内府るるの幸ひ此事討果を
存しと大言平のり
あつる実在の難免越たり
足是くさる人あつるお
先極むしりあくと下知

しり
油清

実平系軍記二篇巻の市一終
油清

油清

関ヶ原軍記武編卷之廿武

目録

一 大谷吉隆りょうろう 神君乃明智光俊りうちあきと 武

三成ふかひ 諸事しよじ

并金吾秀秋きんごしゆあき 偽言ぎごん 大谷次歌おほやぶつと 歌うた 交まじ

一 徳川源君御備とくがわげんきんごみひ 配くわい の事こと

并な 鴻わし 友行ともゆき 南宮なんぐう 山やま 乃の 牟利むり 長曾ながそ

我欲おこ通^りする事

池清

関ヶ原軍記或篇卷之廿貳

あやふし
大谷吉隆

神君の御明智^り

すまじ
尖^とたち石^り回^りる事

きんご
并^び重^む吉^き秀^{しゆ}林^{りん}偽^{いつはり}言^ご大^{だい}谷^やと^と欺^{あざむ}く事

及^{およ}び浮^う回^{かい}秀^{しゆ}家^け代^{だい}長^{なが}本^{ほん}多^た三^{さん}

孫^{まご}といふ^いの^のあり^{あり}え^え来^き三^{さん}刻^くる

清^{せい}信^{しん}代^{だい}本^{ほん}多^た家^け代^{だい}一^{いつ}類^{るい}なり

左も本多中務吉備がとあり
叙父あり先年針崎一捨の造
款の張本ありその後和順
の時 神農改宗仕ゆ
との 上意此時廣言して
家康公より家康の次ありと
りしころやどのの不振者あり
此同列より松平三郎大原

左を志事つ 池田孫八ありと
三洲を以て遺教ありこれより後
浪人あり 題紙せしとあり
池田家へ出されし三子ありと
あり 仍く年来事仕せし
る 徳川度乃軍配あり
見覚へしより後多三叔本多
氏等んで見せしむる事三子あり

一目見く成程 肉府公り

終る所 徳島 徳島 徳島

ゆふふ見ゆる 徳島 徳島 徳島

徳島 徳島 徳島 徳島

又御本陣の 白鶴 扇子 馬車

肉府公あり その 御

徳島のゆふふ 徳島 徳島 徳島

足中 中 中 中

中 網 云 度 乃 清 籠 附 中 山 及 石

来ると見く あり 軍 勢 の 大 凡 又

万 位 の 見 切 り 中 中 中 中

治 阿 少 博 大 の 中 中 中 中

中 中 中 中 中 中 中 中

徳川 殿 出 陣 あり あり あり

中納言秀忠千軍会戦さうさ
上杉 佐竹の押入の勢を分け
しんよる中よ小勢集るべ
し其ふお玉勢のめん
永く揺る百人屯るこの中へ
いぞ来るやまらる結人の
ころろと強が次物足れと叱り
りり此處大音音隠る石田が

袖を扱え小声ふぬく石田及
能く心得あり
弓矢を取てより以来強遠三
のあふふ久後堅横し
甲斐の信玄江州乃浅井 執前
北朝倉又小田原出丸寺一
小牧長久手の大曾敷及乃軍
功あり志るるに今六十集り

及びて國々國々八列を願を竹よ
ふ是ありん 徳川度勢

の多少の危平角も実素方こ
て 徳川度の名こそ百万

の強きるれりくさのまぐさ
大ふく及びりとりりりる
身中そむつそと結りりりり
及り金吾申納言秀秋も小

早川の衆督ありて故太閤の
とありふら子分あり実を養
の少将が身ありりりり政所
の忠臣子と成り別して秀頼の
親も深しゆらふは度の後身
ての衆人た徳云して石田も
逆賊あり運賊もくべき人
りあらん 徳川衆子

志^しこ^こが^がひ^ひめ^めと^とり^りの^の結^結と^と又^又さ^さん
ぬ^ぬる^る頃^頃伏^伏見^見原^原博^博の^の席^席石^石田^田三^三成^成
か^か急^急那^那志^志こ^この^の建^建根^根を^をも^もも^も急^急
内^内と^との^の川^川細^細川^川戦^戦中^中も^も
右^右兵^兵部^部判^判書^書実^実左^左兵^兵衛^衛尉^尉内^内通^通して
子の^のこ^こび^びれ^れ合^合戦^戦を^を返^返り^り右^右兵^兵部^部判^判書^書切^切
ま^まさ^さの^の神^神文^文を^を送^送り^りい^いま^まく
戦^戦ひ^ひ初^初まり^りる^るを^を表^表切^切して

伊^伊集^集志^志と^との^の結^結束^束あり
実^実や^や好^好車^車門^門を^を出^出て^て忍^忍車^車子^子
里^里と^とま^まの^のあ^あら^らの^の合^合戦^戦秀^秀秋^秋
別^別人の^のの^の下^下席^席の^の報^報復^復と^と成^成り
この^の時^時大^大谷^谷吉^吉隆^隆と^と夏^夏川^川基^基よ
陣^陣に^にあ^あが^がの^の難^難後^後戦^戦を^を
大^大の^の手^手勢^勢た^た急^急な^な大^大垣^垣の^の城^城中^中
来^来り^り石^石田^田と^と對^對せん^んして^て急^急な^な兵^兵

秀秋別をときくは彼實後よ
於くい取ての外乃難候あかり
る合戦実中ふく切りさる
あはその時將を嚙とも益あり
他人のけり足るるんよく
そ此れあやの知色備り其
く對面そまふりさあらんを
某けりく西合のく實後

戦紀一百万逆意り極まり
判遠くお果べり永おの年
来故を聞乃原恩誠義むり
盲目みりて用るるのくびり
そ水車原急まふりあかり
平塚周懐も誠外流り
杉尾山北急まふり秋が陣新に
川西流城りるりや入る

わらふ秀秋を内藤あはれ心え
那く名く在る能あく討面せ
るに吉隆るる所くも宮観
ひ寄りて秀秋を引挿し狼牙
を挿しあく怒りしおりにふ
後を浮りさそも暮るに山
庭うれはりの金吾どのの
故太閤の恩誠山忘御あつ

御初年此秀頼は討し送
んして此度く切せんとの
清也庭世し干隠るる依て
大谷おとりの小刺遠し中しん
とてまきし初るる所
衆人たえ手に汗と挿る中
りたる至志を貸しるる
まきまきし好く討し秀秋

大倭奸おとこの人として又利りを
るる大將たいしやう存ぞんありしは強きやうがん日ひん
古太閤こたかうの内うち患あはき山乃やまのごとく一いっ家け
一つ高たか官くわん高たか録ろく千せん昇のぼりて
でり忘却わしやくまじやとく
々々根ねのせしむむ雑ざつ後ご多たままるる之之
考かんがへくも思おもへく
我輩われら了りやう送きやうんんああるるおおああるるくくら

對面たいめんをさしむむど記きあり異いしん
る記き存ぞんありしは對面たいめんをさしむ
あられまじは良らりり臨りんんで考かんれ
何なにぞ逆心ぎやくしんまじやとくおおああるるも
りれた大將たいしやう是こゝとままるるく高たか官くわんと
思おもひひ一いっ家けに真ま正せいなる人ひと
ああるるもや此こゝ人ひと千せんりりて
其その心こゝろををああるるも

あり君子の歌くべし
事あつてん吉隆は綱をまきく
こ所解けたるもまきく
他人の報復ねん志うれ
法人安堵のるるれ一紙の紙
沈文を去のく世振るを免
この時態野の半王とあつく
秀秋を野心なきこの神文は血

判して大谷く派さる吉隆文
名くく石田方へ送るゆり
有る合戦の南日の秀秋を
又子余騎して平是るん
兼内通既松也るるお城先手
とて大谷の陣切
此軍費して後前
と取り入拾七万石を願

徳川源君所傳(配)りの事
并海友川南文山の毛利
長官承部おこ通づる事

徳川源君所傳(配)りの事
并海友川南文山の毛利
長官承部おこ通づる事

徳川源君所傳(配)りの事
并海友川南文山の毛利
長官承部おこ通づる事

破りあり九月十日破年と
御進發有るく勝山より御籠城
とそゆゆ此處石田三次評定
して軍勢といふが次是總提
標瀬川城前より南にお梅
時より中村が軍代同姓彦左衛門
七千餘騎よして押寄戦ふと
とどむ田中徳永市橋等兵

城をむら勝友近が軍令あ
叶ひ冥赤野強敵なりおの
このせり

家康公

御下知有て井作之部少輔直
政武骨と養つて門より
古終、曰く故急子が福と
押申るごとく人男も十が
九つは是ふ勢を禪懐るを

大軍勢もさういふ法を
あどりも書こりあまづを
いふもいふも押ゆるはり
さぬは強法師の輪鼓あま
ゆるといふもいふもいふ
柁古急子の禅僧ありこの
僧の終りいふもその中此
人此れは法編いふに輪鼓を

いふもいふも押ゆるはり
く押へ法いふもいふも
くるりくといふもいふも
いふもいふもいふもいふも
人間の身の上を何事
いふもいふもいふもいふも
の如くいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも

定あるまゝ身此く千破
しり必し心人習もる哉
前方千変定して心尚ふ
まべしんまのるり
又軍法あ人を深く教
まふまゝしん深く教む
亦し恨みも起るの之
を毛武士千限しん農工

高よりみと一心の差悟
りつゝ一生涯踐行るべし
修了禪僧も時納性素雅
僧よりみと考べし
何事も教みし事
ちがふものありつれど
あまのそつと能く知て
待人を皆是むん

輪蹴押へたる年何ド事
あり志つる時き定め有記
世に申あの人として無常
とぬる軍法の意味を友
ふあゝんぬるを恒く取
て古奇なり

世の中此報を有記こそ

このまあるれ又う記

この世留りのやせん
形跡むごのころの軍法の
まゝあ通む世の中此なる
る記ゆゑを報するれ誰を
袋に入らるがぶくくる
ばあいつまをともみあま
のまづきあてきくまへま
あり定め有記世の實報

も驚りて又福者となす
主願も憂として凡下に
如り下り赤下旗より大
名く如るやど記よ見あ
夫所の中での大款も今日
の味言と如るを形勢持愛
の内子ころぐく本んと
立く西くくを愛と軍法

作畧るべふりて石田三成
部のごく十が十ある
孫利はまやうに軍兵を
とて随分と徳人のを
名とりて其福をむらえん
よし押申るがぶく大
此誇隆も成く兼く此
同鼻度勝利とちがひく

今春秋月朽木 板坂等
く切さるる南交山く
陣をく大軍くのみきつ
くし毛利勢味方結語是
惣勢を足く二の足は
大垣より輝えを勢と揚
き部くくはくく小旗
く一戦く敗北は是編よ

人決治く憑くく存之
斯く 内府公卿備一定也
何りて赤坂表り清本陣は
存続よまづ水内守屋定房山
の下に如友なき赤明 是回
甲斐守も長政 及堂依派も常
重本武法市同く出でる 尚井く
伴誓も亦並井村に備へきり

東一乃先後一と福鴻丸集のち又
正刻其並び孫山の筋を井坪
左部少捕主政 本多中務左捕
右孫 系極丹後守高知又南
文山中丞勢代押一平の荒尾
河池田輝政長谷村より遠及
左馬之介 一柳監物本是の大垣
の道筋の押一平の物取村

の押一平の浪野左京右史音長
堀尾信濃守右晴 山内對守守
一豊又森牧野村乃押一平中村
武部少捕が陣代同く是右集の
有る云著破部山平の回中左部
左捕孫山の所陣新より七宮
此より下押守右吉々之新く
南北三拾余町より流軍勢陣を

名く合戦を結成しつりけは
家康公の任せよおの軍功
越ねんあらうべし明日の
戦て唯一戦り勝敗を改む
なりこのしきあり西
切しつりて陣雨くくし
廣り結ぶとそあしきり
さす明らつていふ結成して

逆賊を討んや評定せしめ
果して冥々系此大合戦も九月
十日あり 肉府公の
清工又の神妙のさし
凡人のあつとつあふあ
を叔石田育つて
肉府公此惣ふの御籠出つり
定法入立騒ぐゆへ時友近

友^{とも}村^{むら}これを見^みく^くい^いやく^{やく}
徳川^{とくせん}殿^のま^まて^てい^いる^るま^まに^に城^{しろ}を^を易^{やす}く^く
お^おり^りの^の屋^やに^に虚^ころ^ろを^を山^{やま}の^の軍^{ぐん}
兵^{へい}系^{けい}徳^{とく}畧^{りやく}を^を軍^{ぐん}勢^{せい}と^と入^{いれ}
直^{ただ}と^と
徳川^{とくせん}殿^のの^の上^{かみ}流^{なが}
し^しの^のま^まに^に味^{あじ}方^{かた}と^と徳^{とく}
の^の形^{かたち}り^り眼^{まなこ}白^{しろ}の^の霧^{きり}を^を合^あて^て法^{ほう}
中^{ちゆう}る^るり^りと^と徳^{とく}軍^{ぐん}勢^{せい}と^と徳^{とく}め^めり^りく

の^のち^ち石^{いし}田^{でん}り^りむ^むら^らの^のく^く日^ひく^く
これ^{これ}果^はる^るこの^{この}瑞^{すい}珠^{しゆ}を^を人^{ひと}冥^{めい}東^{とう}
此^{こゝ}を^を先^{さき}と^とく^く見^みく^くヤ^ヤ
此^{こゝ}を^をより^{より}去^され^れ出^でて^て教^{しやく}へ^へ
城^{しろ}は^は是^{こゝ}の^の時^{とき}を^を惣^{そう}軍^{ぐん}押^{おし}掛^かて^て
大^{だい}垣^{かき}城^{じやう}を^をせ^せり^り居^いる^る人^{ひと}と^とお^お
徳^{とく}め^めり^りの^のせ^せり^りを^をく^く徳^{とく}
城^{しろ}に^にて^て南^{なん}交^{かう}山^{さん}より^{より}援^{えん}徳^{とく}を^をせ^せり^り

とて〜〜〜時を十分九ツの掃利
と事〜〜〜と急り南交
山の毛利輝元〜〜〜びお吉川
長曾秋郎長束安玉寺お
仗者秋〜〜〜〜〜入〜〜
今明日乃〜〜〜〜〜園東輝安
危のり〜〜〜〜〜さちり〜
時を必〜〜〜惣軍〜〜〜
〜

〜〜〜〜〜
〜〜〜掃利成〜〜
送りけ〜
油清

實ヶ京軍記一篇巻の廿二終
油清

